

Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



(Photo: Greyhound to Memphis in 1991)

《グレイハウンドに揺られて》

今回はニューヨークに限らず、アメリカ全土でお馴染みの長距離バス＝グレイハウンドについて。グレイハウンドは1914年に設立されたアメリカ合衆国最大規模のバス会社で、その社名はドッグレースにおいて最も速いエジプトの原産の犬＝グレイハウンドに由来し、車体に描かれたその勇ましいシンボルマークはアメリカ全土で親しまれている。ただ、アメリカは車社会なのでマンハッタンなど交通の便が良く自家用車の必要性が低い都市以外は、一般の家庭で自家用車を持つ割合が高いため、自分が利用していた当時にグレイハウンドを利用する乗客は、バックパッカーや自分も含めた有色人種がほとんどだった。

グレイハウンドを利用したのはニューヨークからメンフィスやインディアナポリスなどを訪れた時や、シアトルやポートランドなど西側に飛行機で渡り、ニューヨークへの帰途で各都市を経由したい時などに利用した。初めてグレイハウンドに乗ったのは21歳の時。初の海外旅行でアメリカ一周の一人旅を敢行した時で、忘れもしないシアトルからサンフランシスコへ向かう路線だった。当時はまだインターネットなどなく、「地球の歩き方」をはじめ旅行者の体験記などで得た情報を元に行き当たりばったりで乗り込む他なかったが、情報誌には「盗難の被害は勿論、傷害・殺人事件なども起こり得る可能性もあるので十分な注意が必要…」などということにも触れられていたため、初めてのアメリカの旅で高鳴る気持ちがあった反面、常に危険を察知しようという緊張感も忘れなかった。

まず、盗難の被害を懸念して、座席に座るや所持品を詰め込んだスポーツバックは棚の上にせず、自分の座席の足元にのせて、寝ている間などにバックを開けられるのを防ぐためにジッパーの部分に日本で用意してきた小さなダイヤル式の鍵を取り付け、更に休憩の合間にトイレに行った際に足元から持ち去られることを防ぐために取手の部分と座席のパイプをダイヤル式のチェーンの鍵で固定するなど万全を期して乗り込んだものだ。その後、ニューヨークで暮らし始めた後もグレイハウンドには度々お世話になったものの、結局怖い目に合うことは一度もなかったが、グレイハウンドは自分にとっては特別な存在だった。

軽い失敗談としては、真夏にグレイハウンドを利用した際に、何も考えずにTシャツ一枚だけで乗り込んで夜間を過ごした時だ。恐らく運転手の居眠りを防止するためののだろう、エアコンをガンガンに冷やした状態で走り続け、凍え死ぬかと思った時があった。周囲を見回すとグレイハウンドの常連と思われるバックパッカーなどは毛布を持参して包まっていたり、厚手の上着を着込んで寝入っていたりして、死ぬほど羨ましく思ったのを覚えている。勿論、その時は一睡もできず、ましてや運転手に「ちょっと寒いんですけど…」なんて声をかける勇氣などなく、途中でトイレ休憩などのために立ち寄るバス・ディーポ（停留所）に早く到着することをひたすら祈るのみで、両手をシーツの太股の間に挟んでひたすら耐え忍んだ。

それぞれのバス・ディーポには独特の雰囲気があり、トイレ休憩などの為に毎回30分くらいバスを止めるのだが、聞いたこともない地名やアメリカならではの広大な土地にポツンとあるような、映画のスクリーンに登場しそうな何とも言えぬ雰囲気を持つバス・ディーポも多かった。そして、当時は必ずと言っていいほど各バス・ディーポの中に「バーガー・キング」が入っていて、他に美味しそうな食べ物売っていない時は、仕方なく「バーガー・キング」のハンバーガーを食べていた記憶がある。余談だが、「バーガー・キング」のケチャップは「マクドナルド」のケチャップに比べると甘酸っぱいのが特徴だった。

また、バス・ディーポの待合席には50セントを入れると見ることができる備え付けの黒い小さなテレビが付いていたが、バスを待つ間にかなり時間があって、あまりにも暇な時には、その備え付けのテレビをポーズと見ていることがあったが、そんな時は家族連れでバスを待つ黒人やスパニッシュ系の子供たちが近寄ってきて、自分たちと肌の色や顔の作りが違う顔を不思議そうな表情で見つめながらも、知らぬ間に隣に座って一緒にテレビに見入っていたなんていう光景も今では懐かしい思い出だ。

グレイハウンドの座席のどこに座るかは好みの問題だが、自分が興味のある都市に向かう時には前方に広がる広大な景色と都市の中心地に到着する際に徐々に街並みが姿を現す最高の景色を見たいが為に、ドライバーの座席の反対側のフロント・ガラスが一面に広がる一番前のシートに座りたいと思うものの、何故かその席はほとんどの場合老人が占領していることが多く、その特等席に座れたことはほとんどなかった。また、一番後ろの座席以外は2人用のシートになるのだが、アメリカならではの異常に体が大きな人が隣に座ってしまった時のショックは体験してみないと分からないだろう。怒るに怒れなく、体を縮こませながら「どうか次のバス・ディーポで降りてくれ！」と祈る他なかった。

最高で22時間グレイハウンドを乗り継いでニューヨークに戻ったことがあったが、マンハッタンに到着した時の安堵感は今でも忘れられない。だが、飛行機では味わえない体験ができるのもグレイハウンドの魅力だ。